

# 柳宗悦の朝鮮理解の特質

## —朝鮮関連初期の著作を手がかりに—

李尚珍\*

(e-mail : esangjin74@gmail.com)

### 目次

- |                      |              |
|----------------------|--------------|
| 1. はじめに              | 4. 「友」としての理解 |
| 2. 歴史・宗教・芸術・人への関心と理解 | 5. おわりに      |
| 3. 直観の理解             |              |

キーワード：柳宗悦(Yanagi Muneyoshi), 植民統治期(Japanese colonial period), 朝鮮(Joseon), 行動(Action), 理解(Understanding)

## 1. はじめに

柳宗悦（1889～1961）は思想家・民芸運動家として、近現代の韓日両国において注目されてきた日本人である。

柳は1895年に初等学科に入学し、1910年に高等学科を卒業するまで学習院に在籍し、哲学者・西田幾多郎、英学者・神田乃武、仏教学者・鈴木大拙、植物学者・服部他之助などの教師に学んだ。そして、日清戦争及び日露戦争による社会の変化を直視し、「軍国主義には反動的でトルストイなどを愛読した、嘗て私は輔仁会雑誌に非戦論を書いて、えらく怒られたりしたが、どうしても自分の方が正しいのだといふ考へをまげること出来なかつた」<sup>1)</sup>と、特に学習院学内の惰性的な軍国主義受容の傾向に対抗的な姿勢を見せていた。

\* 山梨英和大学、教授、韓日文化交流史

1) 柳宗悦(1981)「学習院のこと」『柳宗悦全集第1巻』p.467.

1907年には陸軍大将だった乃木希典が学習院院長に就任し、戦勝の気運のもとに国家を支える人材育成に努めた。

一方、柳は10代にして『学習院輔仁会雑誌』に「吾が疑ひ」（第68号、1906年3月発行）、「聖なる勇士」（第75号、1908年6月発行）を發表し、「吾れ等が敵は外にあらずして内に在り」<sup>2)</sup>としながら、人間の内面の世界と物事の表裏を意識する柔軟な感性を表していた。そして、1910年に東京帝国大学文科大学哲学科に進み、死、霊、人間、物質、心霊などを解明する心理学領域を新しい科学として探っていき、論文「新しき科学」（『白樺』第1巻第6号・第7号）と「メチニコフの科学的的人生観」（『白樺』第2巻第8号・第9号）を發表し、著書『科学と人生』（1911年、靑山書店）を刊行するに至った。

柳が少年から青年へ成長していく過程には、中見真理が指摘したように、戦勝の日本に民族的危機感が薄らぎ、近代国家の体制が整っていくに従って、個の尊重を重視する個人主義が若者達を中心に共感を得るといふ時代の特徴がみられる。<sup>3)</sup>特に柳は、雑誌『白樺』の創刊（1910年4月）に参加し、トルストイ思想に親しみ、思想と行動における個の尊重と個性の確立に同調する、同人の郡虎彦、武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎などの仲間と交わりながら、文芸・美術・思想における近代日本の文化思潮の新構築の道を開いていった。

当時、日本は西洋的近代化を成し遂げ、自らを優越な立場に置いて相対的に日本からみる劣等な東洋を対外的勢力拡張の対象としていくなか、1910年8月29日に「韓国併合に関する条約」による朝鮮植民統治を本格化していった。そして、浅川伯教・巧兄弟のように朝鮮へ移住する日本人が増えていった。雑誌『白樺』の愛読者・浅川伯教(1884～

1964)は1914年9月に朝鮮白磁を手土産に持って我孫子にいる柳に会い、1915年12月には弟巧(1891～1931)と一緒に再び我孫子で柳に会った。その年、柳は26歳、浅川伯教は31歳、弟巧は24歳であったが、その後、生涯親交を深めていき、3人の出会いと活動がのちの日本民芸運動の礎となった。

2) 柳宗悦(1981)「聖なる勇士」『柳宗悦全集第1巻』p.159.

3) 中見真理(2003)『柳宗悦一時代と思想』東京大学出版会、p.12.

柳と朝鮮に関する主な先行研究には、彼の民芸運動の出発点となる朝鮮における活動を当時の朝鮮の若者達（廉想涉や南宮璧等）との交流や「朝鮮民族美術館」設立（1924年、景福宮の緝敬堂内）運動などと具体的な視点からアプローチした「朝鮮における柳宗悦の受容」（金希貞、金沢大学大学院『社会環境研究』8号、2003年）、「柳宗悦を通してみる韓日文化交流の展望」（李秉鎮『日語日文学研究』56集、2006年）、「『廢墟』同人と柳宗悦」（チョ・ユンジョン『韓国文化』43集、2008年）、「柳宗悦の石仏庵認識」（姜嬉静『震檀学報』110号、2010年）などがある。筆者も「在朝鮮日本人浅川伯教・巧兄弟と柳宗悦の朝鮮伝統文化理解の特質―初期の活動を中心に―」（韓国日本文化学会『日本文化学報』第79輯、2018年1月）などを発表し、彼らの思想的な基盤と朝鮮理解における実践的な行動の特徴を明らかにした。しかし、これまでの先行研究では、柳の朝鮮関連の初期の著作に示された朝鮮理解の特質に関する考察が十分ではなかった。

本稿では、日本が朝鮮を劣等な東洋、植民統治の被支配側として捉えているなか、近代日本の知識人・白樺派同人の柳が朝鮮とどのように向き合い始めたのか、社会風潮の影響による偏見などはあったのかということに焦点を当てて、朝鮮関連の初期の著作「石仏寺の彫刻に就て」（『芸術』1919年6月号）、「朝鮮人を想ふ」（『読売新聞』1919年5月20日～24日）、「朝鮮の友に贈る書」（『改造』1920年6月号）を分析し、柳の朝鮮理解の特質を考察する。

## 2. 歴史・宗教・芸術・人への関心と理解

柳は、浅川伯教が朝鮮から手土産に持ってきた朝鮮白磁を「磁器に現はされた形状美（Shape）」と評価し、「之は全く朝鮮の陶器から暗示を得た新しい驚愕だ」<sup>4)</sup>と述べ、朝鮮工芸品の美的価値を認識し始めた。そして、1916年8月に初めて朝鮮に出かけ、晋州や海印寺、石仏寺（751年、現在の石窟庵）などを訪れた。この旅は柳の朝鮮伝統

4) 柳宗悦「我孫子から通信一」『白樺』1914年12月号、p.75.

文化理解における出発点となり、柳は朝鮮觀を醸成し、他者＝朝鮮理解の特質の一つとして、歴史・宗教・芸術・人への関心と理解を示し始めた。

特に、柳は新羅時代に吐含山山頂近く（標高565m）に建てられた石仏寺の石彫に感動を覚え、1ヶ月程の滞在期間中に「三たび巡礼の足を続け」、著作「石仏寺の彫刻に就て」を発表するに至った。そして、その石彫の美が朝鮮の歴史と民族の心によってのみ表現できる「不二」のものであると評価し、石仏寺の建立者・金大城がまさにプラトーン・国宰・信徒・芸術家として朝鮮民族の精神と信仰を具体的に表したと感嘆した。柳は自身の洞察力によって、概念的な宗教と芸術を立体的に可視化した朝鮮民族の表現する、造る資質に気づき、朝鮮理解のための重要なコンテンツとして認識していった。

「不二」について、本稿では詳しく論じないが、仏教の根本理念にある、存在の絶対性・唯一性を認めるということであり、柳は1945年以後「仏教美学」（柳の造語）に心酔し、著書『美の法門』（1949年）を刊行するなど、美と醜という相対を超えた「不二美」を「仏教美学」として追及していった。この石仏寺における直接体験、調査・観察が柳の「仏教美学」構築に少なからぬ影響を与えたであろう。

著作「石仏寺の彫刻に就て」の中には「隣邦の人々の心をも少からず理解し得る喜を得た」と述べられ、以下のように、柳は朝鮮の歴史・宗教・芸術・人への関心と理解する姿勢を整え始めた。<sup>5)</sup>

偉大な仏陀は寂然として彼が不動の姿を蓮台の上に占める。仰ぎ見る者はその相貌の莊嚴と美とに打たれざるを得ぬ。茲は全く内なる靈の世界である。彼は前に四人の女菩薩を、後に十一面の觀世音を、左右には彼が愛する十人の弟子を従へて永遠の限りない栄光を告げるのである。（中略）茲に宗教と芸術とを分ける事は出来ぬ。美と真を二に数へる事は出来ぬ。<sup>6)</sup>

抗し難い動律と、動かし得ない寂靜とが茲には二にして不二である。静けさの深さであ

5) 柳宗悦(1981)「石仏寺の彫刻に就て」『柳宗悦全集第6巻』p.143.

6) 前掲書、柳宗悦(1981) p.130.

る、強さである。然も是等の宗教の力は悉く朝鮮固有の美を通して、残りなく示されてある。再びそれ等の姿を美に流れしめるのは、彼等のみ所有する長く引く線の内なる神秘である。実に彼等こそは朝鮮がその心に画き得た仏の十大弟子である。弟子は実に印度にのみ在つたのではない、新羅の朝にも生きてゐたのである。よしその国家は亡び歴史は移るとも、是等の彫刻に於て、朝鮮は永遠なる宗教の国に活きるのである。<sup>7)</sup>

柳は、石仏寺への「三たび巡礼」という直接体験によって朝鮮の宗教芸術の美と朝鮮民族の芸術的資質に気づき、「此世界の傑作が、まだ一般に知れ渡つてゐないのを心惜しく感じ」、綿密な文献の考証と現地の調査・観察の結果として、朝鮮の宗教芸術とその美への認識を喚起するための初めての著作「石仏寺の彫刻に就て」を発表し、異なる民族が違いを認めて、理解し尊重する方法を提示したのである。これは、柳の朝鮮関連の最初の発表文である「朝鮮人を想ふ」を同年5月11日に書いて、20日から24日にかけて『読売新聞』に連載している間の5月15日から24日までに書いたものである。そして、「京城での半月の思ひ出に、此一編を浅川伯教、同巧両兄に贈る」と、浅川兄弟との交流が柳と朝鮮との関わりに重要な役割を果たしていることをも示唆した。

浅川兄弟は、兄伯教が1913年に小学校の教員(美術)として、弟巧が1914年に林業雇員(後に技手となる)として日本による植民統治期の朝鮮に暮らしはじめ、朝鮮人町に暮らしながら朝鮮人との積極的な交流や衣食住の実体験をもとに日常生活における工芸について関心を高めていった。そして、周りの朝鮮人達が実践的かつ積極的な兄弟を信頼し、日常生活におけるありのままの姿を見せていたことによって、兄弟は生活者としての視線を通して朝鮮の歴史・宗教・芸術・人に関心を持ち、理解していくことができた。<sup>8)</sup>

7) 前掲書、柳宗悦(1981) p.134.

8) 浅川兄弟に関する回想文を紹介する。

- ・「尼寺〔清涼寺〕では一切朝鮮語の達者な巧さんが世話して下さつた。巧さんと尼さんとの対話は実に親しく馴れたもので、側で聞いてみても気持ちのいゝ程愉快に聞かれた」土井浜一「巧さんと尼さん」『工芸』1934年4月号、p.80.
- ・赤星五郎の回想によると、兄弟の朝鮮暮らしは「朝鮮の人々の心の底までしみとおるような愛情にみちたものであり、「その仕事も、朝鮮の人々の間にまったりとけこみ、この国のやきものの心をつかんでゆかれた」浅川たか代(2005)『回想の浅川兄弟』p.77.
- ・「清涼里の朝鮮屋のオンドルに、陶器だの木工だの、多くの朝鮮の工芸品を置いて、それらと雑居して

浅川兄弟と柳との付き合いは生涯続いたが、特に1914年から1916年までの3年間の兄弟との付き合いで、柳は朝鮮の歴史・宗教・芸術・人に関心を深めていき、内面を理解し、個性を見つけることを認識し、それをもって朝鮮と向き合い始めたのである。そして、植民地朝鮮の暮らしに戸惑っていた兄弟は、歴史・宗教・芸術・人を通して他者を理解するという柳の見解に共感し、他者＝朝鮮理解の方法論を見出した。伯教も柳と同様に、1920年10月13日の『京城日報』において「朝鮮人と内地人との親善は政治や政略では駄目だ、矢張り彼の芸術我の芸術で有無相通するのでなくては駄目だ」と述べた。

### 3. 「直観」の理解

柳が植民統治の被支配側の朝鮮の状況を認識し、積極的な言及をしたのは1919年3月1日の朝鮮独立運動後に『読売新聞』（1919年5月20日～24日）に連載した著作「朝鮮人を想ふ」に始まる。そこに柳は、小泉八雲（1850～1904、パトリック・ラフカディオ・ハーン）を異文化理解のモデルとして提示し、八雲の活動を通して「芸術は実に鋭い直観の理解である」として、「直観」による理解の重要性を強調した。具体的には、「物質に於いても霊に於いても彼等〔朝鮮人〕の自由と独立を奪った」日本人に、日本と朝鮮の関係は当時の軍国主義による力関係、「治める」ものではなく、「交わる」ものであることを「隣人との交りは只愛が結ぶ」という確信の言葉で明示した。柳によると、隣人の文化、歴史、芸術の良さを汲み取るのは、他者から教えられたり、強いられたりするのではなく、自然に個々の感性の中にある「直観」によるのである。柳が言う「直観」は、観る側も、観られる側も「ありのまま」の姿であり、率直な心である。

このような「直観」の理解という柳の見解と主張は、イギリスの詩人・画家のウィリアム・ブレイク（1757～1827）に心酔し、浅川兄弟との出会いから朝鮮に関心を持ったことにその

居られた。如何にも楽しさうであつた。（中略）オンドルに寝ころんで、朝鮮の童話だの、童謡だの、民謡だの、色々話してくれた」浜口良光「巧さんと私」『工芸』1934年4月号、p.73.

根拠を見出すことができる。

柳は学習院在学中に、イギリスの詩人・画家のウィリアム・ブレイク（1757～1827）の「無垢の歌（Songs of Innocence）」を読み、関心を持っていたが、1909年に来日したイギリス人のバーナード・リーチ（1887～1979）に出会い、『ブレイク詩集』を朗読してもらいながら、さらにブレイクの著作などを読破していった。そして、1914年に日本初のブレイク研究書『ウィリアム・ブレイク』（叢文閣）を刊行した柳は、ブレイクが訴える「欲望の肯定」、「積極的能動的な自己実現」、「直観・想像の重視」、「律法・抽象的なものの否定」などを的確に捉え、生涯を通してその思想を受容していった。特に、「抽象的なものの否定」と「直観の重視」は、柳のウィリアム・ブレイク論の確立期である1914年に声楽家・兼子との結婚で芸術を身近に認識し、我孫子での自然豊かな生活を始め、浅川伯教との出会い、朝鮮白磁に触れることによって「直観」に目覚めて、その実践の可能生を見出すことになった。

『ウィリアム・ブレイク』の第21章「思想家としてのウィリアム・ブレイク」の中に、「直観」について、以下のように定義されている。

法則を嫌い理性を憎んだ彼が絶えず靈感を求めて自然な生命の衝動直観を重んじた事は著しい事実である。近世の哲学が明かに説いた様に実在を把握するものは知性ではない、直観である。ブレイクは彼の芸術的経験によつて此真理を明瞭に指摘してゐる。直観とは実在の直接経験である。一切の抽象差別を離れて事物の真性に身自ら触れてそのものゝ内に自ら活きる事である。思惟の作用は概念に止つて何等実在の真相をも畫いてはゐない。真理の獲得はいつも直観的経験にある。経験を離れては一切のものは落莫である。（中略）経験は吾々の唯一の所有である。この経験の最も直接的であり純粹であり根本的なものは直観である。直観は実在を捕へ得る唯一の力である。一切の宗教的経験、又は芸術的憧憬の高調は悉く直観的状态を示している。<sup>9)</sup>

一方、柳は「朝鮮人を想ふ」の中に朝鮮の美術を「悲しい」・「寂しみ」の美しさで

9) 柳宗悦(1981)「第21章思想家としてのウィリアム・ブレイク」『柳宗悦全集第4巻』p.321.

あると述べたが、著作「朝鮮の友に贈る書」では「悲哀な美」と言いながらも「固有」、「独特」、「親しげな美しさ」、「深い美」、「その内に潜む驚く可き美」、「美そのものゝ深さ」と言い、朝鮮美術の本質を「『親しさ』intimacyそのもの」であると定義した。そして、「李朝陶磁器の特質」（『白樺』1922年9月号）では「朝鮮の作は吾々を強いる事は決してしない。小共が画いたものの様に奔放な自由な味ひ」があると評価した。これは、柳が固定観念を持つことなく、彼自身の鋭い「直観」によってありのままの率直な心で自由な捉え方をしていたことの表れであると、筆者は考える。

毎日同じ物を見ても「直観」は同じではない。柳は1916年の初の朝鮮旅以降、直接朝鮮の「もの」をみて、「ひと」に出会って、自然に触れて、考えて、研究していくという時間を通して様々な言葉で朝鮮の芸術に関する「直観」を述べてきた。柳は朝鮮理解の方法として「直観」の理解を貫いたが、それが他力に影響されることのない自由な捉え方の「直観」によるものだからこそ可能であって、変わることなく一貫性を持ち続けたのである。

さらに、当時『東亜日報』の記者として、柳の「朝鮮人を想ふ」を翻訳掲載（1920年4月12日～18日）した廉想涉は、翻訳文の序文に、柳が「真理に生きようとする者」であり、「朝鮮の芸術を熱愛し」、「朝鮮民族の芸術的天分」の豊富さを認識し「朝鮮芸術の将来を頌榮する」と評価した。そして、廉は雑誌『開闢』1922年4月号に論文「個性と芸術」を發表して、柳が朝鮮の美として捉えた「線」が朝鮮民族の「民族的個性の表現」であるとして、柳の見解を受け入れた。<sup>10)</sup> 柳の「ありのまま」の「直観」による朝鮮理解は朝鮮の若者達にも共感を得ていたのである。

#### 4. 「友」としての理解

「朝鮮人を想ふ」の發表後に、日本に留学中の朝鮮の若者達が柳を訪ねるようになっ

10) 廉想涉「個性と芸術」『開闢』第22号、1922年4月1日発行、『開闢—影印本』開闢社、p.8.



た。その中には雑誌『白樺』の愛読者で、後の朝鮮文芸誌『廢墟』（1920年7月25日創刊、1921年1月20日終刊）の同人・南宮璧と『東亜日報』創刊（1920年4月）のメンバー・廉想渉がいた。

3・1朝鮮独立運動以後、朝鮮民衆の独立への強い願望をあらわすことのできる活動を求め続けていた若者達は、自力でできる文芸活動を通して、積極的にその活動のモデルを探したが、皮肉にもそれは日本の白樺派であった。彼らは、特に白樺派の柳の活動が朝鮮の政治的独立への見解を見せないものであったものの、朝鮮の主体性や伝統文化の固有性を訴えることに賛同し、協力したのである。言論の自由のない朝鮮の若者達には日本人・柳を通しての間接的な意思表示だったのであろう。

そして、その交流の中、柳は「私の知れる、又は見知らぬ多くの朝鮮の友に、心からの此書翰を贈る」として、著作「朝鮮の友に贈る書」を執筆し、『東亜日報』に1920年4月19日と20日に2回朝鮮語訳で掲載したが、実は先に日本での掲載を試みていた。柳は、同文を同年3月14日に脱稿し、同17日に新潮社へ原稿を送ったが、内務省警保局より禁じられたので掲載できず、その後執筆の日付を改め、多くの伏字付きで、同年の『改造』6月号に掲載された。同年6月16日には英訳抜粋が『The Japan Advertiser』に掲載された。<sup>11)</sup>

伏字にされた文章には「日本に生れた一人として、茲に私はその罪を貴方がたに謝したく思ふ」、「為政者は貴方がたを同化しようとする。然し不完全な吾々もどうしてかかる權威があり得よう。之程不自然な態度はまく又之程力を欠く主張はない。同化の主張が此世に購ひ得るものは反抗の結果のみであらう」、「正に日本にとつての兄弟である朝鮮は日本の奴隷〔奴隷は伏字〕であつてはならぬ。それは朝鮮の不名誉であるよりも、日本にとつての恥辱の恥辱である」である。<sup>12)</sup>

11) 中見真理(2013)『柳宗悦－「複合の美」の思想』p.875.

12) 柳宗悦(1981)「朝鮮の友に贈る書」『柳宗悦全集第6巻』pp.35-49.

このような検閲を受けながらも、先に朝鮮語翻訳文を発表した理由は、「朝鮮の友に贈る」メッセージとして、日本の植民統治を「不自然な勢い・関係」であると認識し、「力の日本」ではなく柳自身が重視している思想・宗教・芸術における「情のある日本」、「正しい日本」を見て欲しいという訴えと、日本に対する朝鮮の反感が極めて自然な結果であるという認識と理解を柳自身の確信のもとで示すためであった。

そして、柳は歴史の上でも、「日本は嘗て朝鮮の芸術や宗教によつて、その最初の文明を産んだのである。今日此事は感謝を以て記憶されねばならぬ」と指摘し、「血に近い朝鮮と日本とは、もっと親しさや情愛が濃いはずであらねばならぬ」と両国の関係性を強調した。<sup>13)</sup> それは当時、日本によって虐げられている朝鮮の歴史と伝統、芸術、人をたたえ、常に彼が認めている「友」としての「朝鮮の芸術に対して心からの敬念と親密の情」を朝鮮理解の方法として明示したのである。

さらに1920年5月、2回目の朝鮮旅から朝鮮に対する「信頼と情愛とのしるし」<sup>14)</sup>として、講演会や兼子夫人の音楽会などを開催するに至った。柳は周囲から「京城の様な所では、高貴な人々の助力なくしては決して行はれない」、「日本人が朝鮮人の間で満足な会を開く事は出来ない」、「朝鮮人の手のみでよき結果を齎し得る会は開き得ない」と言われていたが、音楽会では「集つた人々は堂に溢れて遂には入場を断る事を余儀なくされ」追加公演を開くまでとなった。<sup>15)</sup>

同年5月6日の『東亜日報』は音楽会の「聴衆は1300人を超え」、「会場が溢れるほどの満員」であったと報じ、柳も「京城での音楽会は、『東亜日報』主催のもとに凡て朝鮮の人々の尽力によつて開かれる運びになり」、「予期し得ない最初の感謝であつた」と述べた。<sup>16)</sup>

この音楽会には、当時創刊したばかりの朝鮮の『東亜日報』が柳の朝鮮における文化活動に賛同する姿勢を表し、積極的に協力した。この協力は新聞社の最初の文化事業と

13) 前掲書、柳宗悦(1981) pp.47-50.

14) 前掲書、柳宗悦(1981) p.49.

15) 柳宗悦「彼の朝鮮行」『改造』1920年10月号、p.33.

16) 前掲書、柳宗悦(1920) p.31.

しての意義をも持っていた。なぜなら、兼子夫人の独唱会は朝鮮で開かれた最初の西洋音楽会として意義をも持っているからである。

このように柳が植民地朝鮮への「信頼と情愛とのしるし」という催しを企画し、当時の朝鮮の若者達の協力を得られたことが「朝鮮民族美術館」設立運動の出発点であり、のちの日本民芸運動の礎となった。朝鮮の若者達は柳の政治性を持たない活動を通して、自国朝鮮の文化的・芸術的優越性を再認識し、自負心を育てることによって朝鮮の未来への希望を見出す手がかりにしたのである。

柳は、朝鮮における音楽会や講演会、展覧会の文化活動が「朝鮮に対する私の情を披瀝するため」であり、「芸術的天賦に豊かな朝鮮民族への信頼のしるし」であることを力説しながら、朝鮮理解の方法を自ら実践した。<sup>17)</sup> そこには、朝鮮の「芸術＝もの」を通して文化と歴史を認識し、「友＝ひと」を通して民族の主体性を認識した柳が他者の固有性と多様性を認めながら、日本と朝鮮の対等な関係維持を求める平和思想をも内含されている。

## 5. おわりに

柳は、軍国主義・国家主義が蔓延した時代を生きたが、10代から「軍国主義には反動的でトルストイなどを愛読し」、「非戦論」をも主張し、当時の国家・社会に関する疑問を持ちながら、全体・集団ではなく個・自己を強く意識し、人間・物質・心霊の本質と正体への探求心を持ち続けていった。そして、白樺派の活動を通して、自己と個性の確立・維持・尊重に関する積極的な主張を示していくなか、日本の植民統治下の朝鮮を認識するようになった。

特に、在朝鮮日本人・浅川兄弟の生活者としての体験と実践の影響を強く受けていて、「日本は間違っている」<sup>18)</sup> という問題意識のもとに柳自身の関心と「直観」と実践による

17) 柳宗悦(1981)「朝鮮の友に贈る書」『柳宗悦全集第6巻』p.49.

18) 柳宗悦(1989)「1914年8月28日付リーチへの手紙」『柳宗悦全集21巻(上)』p.181.

朝鮮理解を着実に進めていったのである。本稿で取り上げた朝鮮関連の初期の著作「石仏寺の彫刻に就て」、「朝鮮人を想ふ」、「朝鮮の友に贈る書」には、その時代の課題ともとられる自己と個性の確立・維持・尊重の問題に、西洋と東洋、日本と朝鮮のような異質なものの共生共存、相互尊重を答えにして向き合っていた柳の様子が示されている。

さらに、柳の朝鮮関連初期の著作のなかで広く知られている一つに、1922年に発表された「失はれんとする一朝鮮建築の為に」（『改造』1922年9月号）がある。ここに柳は、朝鮮総督府が新庁舎建設のために景福宮の光化門の移転を計画していることを知り、この「東洋古建築の無益な破壊」を日本による朝鮮の歴史・伝統・芸術の破壊であるという問題提議と批判を明示して、「光化門よ、愛する友よ」、「お前を死から救はうとする者は反逆の罪に問はれるのだ」（伏字文）、「かゝる愛すらも自由には現はし得ない此世だ。否、かゝる愛を殺せよと強いられてゐるのだ。苦しさが胸に迫ってくる」、「誰もが言葉を躊躇してゐる。併し沈黙の中にお前を埋めて了ふのは私には余に悲惨だ。それ故云い得ない人々に代つて、お前の死に際しもう一度お前の存在を此世に意識させる為に、私は此一篇を書きつらねるのだ」と述べ、「友」として「友」である朝鮮民族が継承してきた歴史・伝統・芸術＝光化門を守るべき象徴として明示し、互いを認めて尊重すべきであることを伝えた。<sup>19)</sup>

柳は日本による朝鮮植民統治を積極的に反対するような政治性を持つ言論活動をしたのではないが、異質なものに対する偏見・差別はなく、むしろ異質な物＝他者を知ることで自己を認識できることに気づき、初期の著作を通して日本人に朝鮮理解を呼び掛けていたのである。それは、時代に関係なく「ひと」と「ひと」の本質的かつ普遍的な他者理解の方法であり、今日の韓日両国の人々が再認識することによって和解が期待できるだろう。

19) 柳宗悦(1981)「失はれんとする一朝鮮建築の為に」『柳宗悦全集第6巻』pp.145-154.

## 【参考文献】

- 廉想涉(1922)「個性斗芸術」『開闢』第22号(『開闢—影印本』開闢社)、pp.1-9.  
浜口良光(1934)「巧さんと私」『工芸』1934年4月号、pp.72-77.  
土井浜一(1934)「巧さんと尼さん」『工芸』1934年4月号、pp.79-81.  
柳宗悦(1914)「我孫子から通信一」『白樺』1914年12月号、pp.72-82.  
\_\_\_\_\_(1920)「朝鮮の友に贈る書」『改造』1920年6月号、pp.1-14.  
\_\_\_\_\_(1920)「彼の朝鮮行」『改造』1920年10月号、pp.27-50.  
\_\_\_\_\_(1981)『柳宗悦全集第1巻』筑摩書房、pp.156-166、465-468.  
\_\_\_\_\_(1981)『柳宗悦全集第4巻』筑摩書房、pp.301-359.  
\_\_\_\_\_(1981)『柳宗悦全集第6巻』筑摩書房、pp.23-51、110-154.  
\_\_\_\_\_(1989)『柳宗悦全集第21巻-下』筑摩書房、pp.180-181.  
中見真理(2003)『柳宗悦—時代と思想』東京大学出版会、pp.3-388.  
\_\_\_\_\_(2013)『柳宗悦—「複合の美」の思想』岩波新書、pp.1-221.  
水尾比呂志(2004)『評伝 柳宗悦』筑摩書房、pp.13-631.  
高崎宗司・深沢美恵子・李尚珍編(2005)『回想の浅川兄弟』草風館、pp.8-311.  
チョ・ユンジョン(2008)「『廢墟』同人と柳宗悦」『韓国文化』43集、pp.347-373.  
姜嬉静(2010)「柳宗悦の石仏庵認識」『震檀学報』110号、pp.191-213.  
松竹洸哉(2018)『柳宗悦—「無対辞」の思想』弦書房、pp.5-298.  
李尚珍(2018)「在朝鮮日本人浅川伯教・巧兄弟と柳宗悦の朝鮮伝統文化理解の特質—初期の活動を中心に—」『日本文化学報』第79輯、韓国日本文化学会、pp.5-31. (DOI: <https://DOI.org/10.21481/jbunka..79.201811.005>.)

논문 투고 일자 : 2020. 09. 26.

논문 심사 일자 : 2020. 10. 26.

게재 확정 일자 : 2020. 10. 28.

---

 <要旨>
 

---

 柳宗悦の朝鮮理解の特質  
 — 朝鮮関連初期の著作を手がかりに —

李尚珍

本稿は、軍国主義・国家主義が蔓延した時代を生きた白樺派同人の柳宗悦が、「日本は誤っている」という問題意識のもとに歴史・宗教・芸術・人への関心と「直観」並びに「友」としての実践活動による朝鮮理解を着実に進めていったことを、朝鮮関連の初期の著作「石仏寺の彫刻に就て」（『芸術』1919年6月号）、「朝鮮人を想ふ」（『読売新聞』1919年5月20日-24日）、「朝鮮の友に贈る書」（『改造』1920年6月号）を通じ分析したものである。柳は日本による朝鮮植民統治を積極的に反対するような政治的言論活動をしたわけではなかったが、異質なものに対する偏見や差別はなく、むしろ異質なものは他者を知ることで自己を認識できることを示しながら、自己と個性の確立・維持・尊重の問題に、西洋と東洋、日本と朝鮮のような異質なものの共生共存、相互尊重を答えとして向き合い、特に初期の著作を通して日本人に朝鮮理解を呼びかけていたのである。

 Characteristics of Yanagi Muneyoshi's Understanding of Korea  
 — Focusing His Early Writing —

Lee, Sang-jin

The purpose of this paper is to analyze characteristics of Yanagi Muneyoshi's understanding of Korea in the colonial period by investigating the content of his early writing about Korea. The articles analyzed in this study are "Sculpture of Seokbulsa", which was published in *Geijutsu* in 1919, "My Feeling Toward Fellow Koreans" in the *Yomiuri Newspaper* from May 20-24, 1919, and "A Letter to My Korean Friends", which was published in *Kaijo* in 1920.

Yanagi made his first trip to Korea in 1916. He visited many places including Busan, the Hayin Buddhist Temple, Seokguram Grotto, and part of the Bulguksa Temple complex in Gyeongju. From that time on, he became interested in Korean history, religion, art, and people, and he began to understand them.

Yanagi did not engage in political speech activities that actively opposed Japan's colonial rule in Korea. He showed that there was no prejudice or discrimination against foreign objects, and that he could recognize himself by understanding a foreign culture. He had no prejudice or discrimination against foreign cultures; instead, he showed that we can recognize ourselves by understanding something different.